

#### 4 傍十二指腸ヘルニア 2 例の経験

多々 孝・植木 匡・石塚 大  
番場 竹生・若桑 隆二

刈羽郡総合病院外科

〔症例 1〕41 歳男性. 一過性の強い心窩部痛が短期間に繰り返すため近医を受診し, 紹介により当院入院. CT, 小腸造影にて傍十二指腸ヘルニアと診断し, ヘルニア修復術を施行. 傍十二指腸窩に嵌入, 癒着した空腸を整復し, ヘルニア門を閉鎖した. 術後経過は良好であった.

〔症例 2〕36 歳女性. 食後の嘔気嘔吐で発症. 食事を減らすことで嘔吐を回避していたが, 嘔気は消失せず近医を受診. CT にて傍十二指腸ヘルニアを疑われ当科紹介入院. 小腸造影等の精査の後, ヘルニア修復術を施行. 術後経過は良好であった.

傍十二指腸ヘルニアの症状は非特異的で, 慢性の消化器不定愁訴を呈したりすることがある. 診断には消化管造影や CT が有用である.

#### 5 臍・腸間膜動静脈奇形に対し臍合併臍体尾部切除・小腸部分切除を行った 1 例

園田 桂子・長倉 成憲・渋谷 和人  
及川 明奈・斉藤 英俊・山洞 典正  
鹿志村純也\*・岡 邦行\*\*

水戸済生会総合病院外科

同 内科\*

同 病理科\*\*

症例は 46 歳の男性. 人間ドックの腹部エコーで臍体部に嚢胞性病変を指摘され, 精査目的に内科に入院した. 身体所見および血液検査に異常はなかった. 腹部 CT では臍体部に径 2cm 大の腫瘤を認め, 同部は造影早期から濃染した. また空腸腸間膜にも造影早期から濃染する部位を認めた. 血管造影では, 動脈相で臍体部および空腸腸間膜に一致する部位に網目状異常動脈が描出され, きわめて早期に門脈も描出された. 以上より臍及び空腸腸間膜の動静脈奇形と診断され, 当科にて, 臍合併臍体尾部切除, 空腸部分切除を施行した.

臍, 腸間膜の動静脈奇形は門脈圧亢進や実質内

での出血を来す可能性があり, その予防のためには外科的切除が有用であると考えられた.

#### 6 当科における腹腔鏡下脾臓摘出術の検討

岡村 直孝・須田 和敬・皆川 昌広  
桑原 明史・長谷川 潤・島影 尚弘  
草間 昭夫・内田 克之・田島 健三

長岡赤十字病院外科

過去 11 年間に 11 例経験した. 10 例が ITP で, 1 例は肝硬変症であった. 男性 6 例, 女性 5 例, 平均年齢は 46.2 歳 (22 歳～76 歳) であった. 最初の 1 例は平成 6 年に行なったが, 術中出血のため開腹術に移行した. 但し, この症例の最終出血量は 120ml であった. 2 例目は平成 12 年に行なった. それまでの間は開腹術を原則とした. 2 例目以降は全て腹腔鏡下に行えたが, 肝硬変で巨脾 (360g) の 1 例では脾上極が展開できないため, HALS に移行した. 平均出血量は 178ml, 平均手術時間は 3 時間 12 分 (150 分～228 分), 平均麻酔時間は 4 時間 30 分 (236 分～317 分), 麻酔開始から手術開始までは平均時間は 42.7 分 (28 分～52 分) であった. 副脾は 2 例に認められ, 摘出した. 脾門部の血管処理は GIA にて一括処理を原則としたが, 場合によっては複数使用した. 平均在院日数は 9.6 日 (3 日～27 日) で, ほとんどが 10 日未満で退院した. 本手術は低侵襲で, 有用と思われた.

#### 7 生後 25 日で生体肝移植施行した新生児劇症肝不全の 1 例

大矢 洋・佐藤 好信・山本 智  
岡島 英明\*・阿曾沼克弘\*・猪股裕紀洋\*  
畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科

熊本大学医学部小児外科・移植外科\*

【はじめに】生後翌日より肝不全状態を呈し新生児期に生体肝移植に踏み切った, まれな新生児

劇症肝不全症例を経験したので報告する。

症例は生後25日男児，主訴は軽度黄疸．妊娠経過は特に異常無し．妊娠39週1日正常経膈分娩で出生，体重2930g．Apgar score 8点/1分，10点/5分．出生後呼吸苦出現，検査で肝機能異常，血小板低下，凝固機能の著明な低下認め，肝不全の診断で生後1日当院NICU搬送．連日のFFP補充も凝固機能の改善なく，次第に血中アンモニア値上昇し生後19日よりほぼ連日交換輸血施行．保存的には救命困難と考えた．原因疾患はヘモクロマトーシス，胆汁酸代謝異常症等考慮したが確診に至らず．家族より生体肝移植の希望あり，患児の父親をドナーとして2005年12月15日（生後25日，体重3480g）生体部分肝移植施行．肝臓は萎縮著明で摘出肝重量25g．外側区域の一部をグラフトとし（114g）同所性肝移植施行．血管胆管合併症なく順調に回復した．

【考察】新生児肝不全は非常に稀で原因特定困難な場合も多く救命率も低い．本邦の新生児肝移植は3例，生後27～30日で施行，1例生存とされている．本例の経過，病態につき文献を交えて報告する．

## 8 約28年の経過で悪性化した solitary fibrous tumor の1例

渡辺 健寛・古泉 貴久・広野 達彦  
国立病院機構西新潟中央病院呼吸器外科

症例は当院初診時73歳，女性．47歳時に検診異常影で大学病院受診．右中肺野に約2.5cm大の腫瘤を指摘され，胸膜腫瘍疑いの診断．手術を勧められたが拒否．1997年11月他疾患の経過観察中偶然胸部X線で右肺腫瘤を指摘され11月当院初診．右中肺野に7cm大の腫瘤影を認めた．しかし，治療拒否し外来通院せず．1998年3月近医で胸部X線異常影の増大を指摘され当院紹介・入院．胸膜腫瘍の診断で6月腫瘍摘出術と中葉切除施行．病理診断は悪性胸膜中皮腫であった．2003年4月右前胸部痛と右前胸部膨隆を主訴に来院．再発の診断でBSCを施行し，12月死亡された．解剖所見は腫瘍の心筋転移を認め，solitary

fibrous tumor の診断であった．

## 9 肺腫瘍に対するラジオ波治療後に発生した難治性気胸の1例

本野 望・青木 正・土田 正則  
橋本 毅久・林 純一・石川 浩志\*  
新潟大学医歯学総合病院第二外科  
同 放射線科\*

症例は71歳男性，肺癌に対する肺葉切除後の経過観察中に多発肺癌を発見された．低肺機能のため外科的治療は困難と判断され，ラジオ波による治療を行った．治療後に気胸を発生した．癒着療法を試みたが改善無く，胸腔鏡下手術を行った．焼灼部近傍の胸膜は陥没しその周囲から空気漏れが確認できた．

## 10 虚血性壊疽に対し術後，陰圧創傷閉鎖法を施行した1例

中山 卓・斎藤 正幸・篠原 博彦  
岡崎 裕史・矢澤 正知  
県立中央病院心臓血管呼吸器外科

縦隔炎や糖尿病性壊疽に対する陰圧創傷閉鎖法の有用性が報告されている．今回，虚血性壊疽の症例に対し，血行再建後，同治療を併用し良好な結果が得られたので報告する．症例は65歳，男性．左足背および外踵部の潰瘍と疼痛が出現し，ASOと診断．まず腹部大動脈-両側大腿動脈バイパスを施行したが，改善しないため右大腿-膝窩動脈バイパスを追加．さらに可及的なデブリードメントの後， $-99\text{cmH}_2\text{O}$ の陰圧創傷閉鎖法を併用．術後約2週間で良好な肉芽上昇が得られ，分層植皮を行い，ほぼ治癒せしめた．同方法は簡便で侵襲性が低く，かつ肉芽形成の促進に有効であると考えられた．